

令和4年度 鹿角市立十和田中学校 学校評価書

<参考表示>

目標	市の施策の基本方向	評価指標（学校の実践課題）	自己評価 中間	外部評価 中間	自己評価 年度末	外部評価 年度末	市の施策の柱
確かな学力と高い志を育てる教育の充実	基本方向1 自己実現のために必要な確かな学力の定着を図ります。	○分かる・できる・学び合う授業の構築（個に応じた指導の充実・「授業のかいたく」の実践）による基礎学力の定着・向上 ○hyper-QUの分析と活用による学習集団の把握と共通理解・互いに認め合う学習集団づくり ○読書活動の推進（朝読書の推進・生徒主体による読書活動の推進）と授業と運動した読解力の育成（ヒブリオバトルの実践）	3	3	3	3	①なぜ学ぶのかを明確にした主体的・対話的で深い学びの実現 ②望ましい学習集団の育成による児童生徒の学力向上対策 ③読書活動の推進と読解力の育成
	基本方向2 自分の未来を自分で切り開き、ふるさとを支える気概をもった人材を育てます。	○発達段階に応じたキャリア教育の推進（望ましい勤労観・職業観等の育成・進路指導の充実） ○地域に学び、地域に貢献する気概をもった生徒の育成（TAPの活動内容の充実・地元企業との連携・ライフスタディの充実） ○地域と連携した地域を元気にする取組の実践（地域活動・行事・ボランティア活動への参加奨励・生徒の学習成果の披露）	3	4	4	4	①社会的・職業的自立を目指すとした教育活動の推進 ②ふるさとへの理解を深める体験的な活動の推進 ③鹿角市の未来を支え盛り上げる人材の育成
	基本方向3 情報活用能力とコミュニケーション能力をもった、自分らしく輝く人材を育てます。	○学びの質を高めるICTの活用と情報モラル教育の推進（ICTを活用した主体的な学習の構築・関係機関と連携した情報モラル教育の推進） ○コミュニケーション能力（TPOにあった話し方）の向上とグローバル化に対応した情報発信 ○鹿角のよさ、十和田のよさを知り情報発信できる生徒の育成（TAP活動内容の充実による情報発信）	4	4	4	4	①ICTを活用した情報活用能力と情報モラルの育成 ②グローバル化に対応する能力の育成 ③他地域との交流によるコミュニケーション能力と発信力の育成
豊かな心と健やかな体を育み、将来の自立を支える教育	基本方向4 豊かな心を育みます。	○活力ある集団活動を通じた居心地のよい集団づくりと豊かな人間性の育成（自尊感情・自己肯定感の醸成） ○道徳教育の充実と「特別の教科 道徳」授業実践による道徳的判断力・心情・実践意欲の育成 ○いじめ防止と教育活動全体を通じた人権教育の推進	3	3	3	3	①自己有用感と主体性を育む学習集団の育成 ②規範意識や思いやりなどを育成する道徳教育の充実 ③共生社会の形成に向けた人権教育の推進
	基本方向5 健やかな体を育みます。	○家庭との連携による望ましいライフスタイルの構築（HANキャンペーンの実施） ○食に関する指導の充実と家庭と連携した望ましい食習慣の形成 ○健康と体力の保持増進と運動に主体的に取り組む生徒の育成（新体力テストの実施と分析・保健体育科、委員会、部活動における体力向上の取組）	3	3	3	3	①規則正しい生活習慣の確立 ②食育の推進 ③体育授業及び運動部活動の充実と体力の向上
	基本方向6 子ども一人一人に応じた、きめ細かな教育を推進します。	○ユニバーサルデザインの視点による授業づくりと教育ニーズに応じた多様な学びの場の構築 ○小中連携による情報の共有の場の構築と個別支援の充実（学習支援、相談活動） ○不登校の未然防止・不登校への適切な対応（学習支援等）と教育相談の充実	3	3	3	3	①特別支援教育の充実 ②就学前相談の充実と小・中学校との円滑な接続 ③不登校児童生徒の居場所づくりと学校復帰に向けた支援の充実
学校教育環境の充実を図り、地域とともに取り組む、多様で質の高い教育	基本方向7 子どもの成長を支える魅力的で安全・安心・良質な学びの場をつくりまします。	○校舎内外の安全確保と活動が見える潤いある学校環境整備 ○自分の命は自分で守ることができる生徒の育成と通学時の安全対策 ○教職員の危機管理能力の育成（学校の危機管理・教職員の不祥事防止）	3	3	3	3	①安全・安心・良質な学校環境づくりの推進 ②通学の安全対策 ③学校の危機管理対策
	基本方向8 教職員のモチベーションと資質の向上を図ります。	○計画的な校内研修の実施と諸調査の活用及び校外研修の奨励と研修内容の共有 ○キャリアに適した業績目標の設定とOJT（OJL）による人材育成 ○業務改善計画の作成と評価及びボトムアップによる業務改善と教職員の意識改革	3	3	3	4	①教職員研修の充実 ②人事評価制度とキャリアアップ研修の充実 ③教職員の働き方改革の推進
	基本方向9 地域とともに特色ある学校づくりの推進に努めます。	○コミュニティスクール機能の充実（学校経営グランドデザインの承認・学校評価等）と熟議による地域課題の共有 ○地域資源（史跡、企業、人材、施設）の積極的な活用と地域に開かれた学校づくり ○地域と連携した特色ある学校づくり・地域伝統芸能の継承に係る活動の奨励	4	4	4	4	①学校運営協議会を核としたコミュニティ・スクールの推進 ②地域学校協働推進事業による学校の活性化 ③学校の創意工夫による特色ある学校経営の推進

基本方向1「自己実現のために必要な確かな学力の定着」

児童生徒の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	落ち着いて学習に取り組むことができていますが、基本的な学習習慣や探求型授業の構築の点で課題が見られる。	中間	3	中間	3	生徒が主体的に学習に取り組んでことが、アンケートや授業参観の様子からも伺える。今後、さらにペアでの意見交換や発表の場の設定等を行い、意欲を発表につなげてほしい。
年度末	学び合うことを通して、基礎学力の向上を図ってきているが、全体で意見を述べたりするなどの、発表には課題がある。	年度末	3	年度末	3	ICT機器が効果的に活用され、学習へのモチベーションの向上につながっている。学習の意義や進路との繋がりを意識させながら、学力の定着や積極的な発表につなげてほしい。
自己評価の概要と学校の改善策		【中間評価】昨年度の実践をもとに、さらにICT機器を文房具のように活用を進めながら、生徒たちの主体的な学習につなげていきたい。生徒は、授業への意欲はあるものの、発表に対する抵抗感が本校の課題である。ペア・グループワークなどの話し合いの場を意図的に設けながら、自然に改善を図ってきたい。朝読書や図書ルーム「本の森」の利用、ビブリオバトルへの取組を軸に、読書活動の推進が図られている。昨年度より、家庭での読書習慣の向上が見られる。 【年度末評価】今年度も授業におけるICT機器の積極的な活用を進め、生徒の主体的な学びや多様性を生かした学習の機会を設けるように実践を繰り返してきている。今後もICT機器の活用機会の推進と効果的な活用の在り方について実践を深めていきたい。一方で、「発表への消極性」については、今年度も改善すべき課題として残っている。小グループでは述べることもできて、全体では萎縮してしまう傾向が強い。教科内、教科外、学校教育活動全体で意図的に場を設けながら改善を図ってきたい。基礎学力の定着に関しては、教科による大きな差が見られることが課題である。より良い実践を行っている教員の授業を参考にしながら、互いに研修に努めたい。				

評価指標（学校の実践課題）	具体的な取組内容
○分かる・できる・学び合う授業の構築	・「授業のかいたく」の実践による基礎学力の定着・向上 ・多様な学習形態の工夫 ・必要性や必然性のある学習課題の設定 ・思考を広げ深める学び合いの工夫 ・学びを価値づける振り返り
○hyper-QUの分析と活用による学習集団の把握と共通理解・互いに認め合う学習集団づくり	・hyper-QUの実施（年2回）と分析・情報交換 ・hyper-QUの個表の活用
○読書活動の推進と授業と連動した読解力の育成	・朝の15分間読書の実施 ・委員会活動の充実（図書コーナーの設置、本の紹介等） ・全校ビブリオバトルの試み

<資料> ※【 %】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合

○主体的な学習【生徒89% 保護者62% 教職員100%】

○考えを積極的に発表【生徒68%(12月)←68%(7月)】

主体的な学習については、肯定的な回答が生徒・教職員共に多かったが、自分の考えを積極的に発表については、前期から改善が図られておらず、意図的な場の設定が必要とされる。

○朝読書・読書活動

【生徒90% 保護者58% 教職員100%】

学校での読書活動は、確実に実施されているが、取組の質について課題が見られた。



【ビブリオバトル全校大会から北鹿、県大会へ】



【第2回校内授業研究会（教科）】

【生徒】意欲をもって授業での学習に取り組んでいますか。



【生徒】主体的に朝読書など読書活動に取り組んでいますか。



3年生の全国学力・学習状況調査では全国を上回った。1・2年生の県学習状況調査では、教科による差が大きかった。良い実践の共有化を図りたい。

基本方向2「自分の未来を自分で切り開き、ふるさとを支える気概をもった人材の育成」

児童生徒の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	外部機関との連携を図りながら、キャリア諸能力の育成やふるさとの未来を支える気概を育てたい。	中間	3	中間	4	職場体験学習や校外学習が再開実施されうれしく思っている。実際に見る・聞く・体験することや地域に学び、貢献することで、生徒の成長を促す良いきっかけ作りの場となっている。また、TAPの縦割り実施も良好と感じる。
年度末	十和田魅力アッププロジェクト等を通して、大湯環状列石や毛馬内盆踊り等は、ふるさとについて考える効果的な機会となっている。	年度末	4	年度末	4	TAPの全校縦割りでの取組が効果的であったと思う。チームワークを学ぶよい機会でもある。また、ユネスコ世界遺産を継承し、世界に発信していく今後の活躍に期待したい。

自己評価の概要と学校の改善策	【中間評価】外部機関との協議や調整を行いながら、1年生校外学習（宿泊体験）、鹿角小坂地区統合高説明会（3年生）を実施することができた。十和田魅力アッププロジェクトは、今年度から全校縦割りでのプロジェクト編制とし、大湯環状列石を中心テーマに設定し、学校祭での発表に向けて、1学期から準備を開始している。縦割りにした効果や計画的な実践の成果と思われるが、例年より、プロジェクトの計画や関係機関（毛馬内盆踊り、大湯環状列石ガイド、劇指導等）との連携及び進捗状況がスムーズである。
	【年度末評価】2年生が数年ぶりに職場体験学習を実施することができた。事後の発表会を通して、「働くこと」について深く学ぶ機会となった。12月に、地域振興局と連携し、「地元企業との意見交換会」も実施することで、全校生徒の地元で働くことについての意識醸成を促すことができた。 十和田魅力アッププロジェクトでは、劇（大湯ストーンサークル）、ガイド（大湯ストーンサークルの日本語ガイド及び館内展示の英語ガイド）、伝統芸能（毛馬内盆踊り、大太鼓、民話）、地域貢献（保育園・介護施設への制作物寄贈、作品制作、企画弁当）の4プロジェクトに、全校縦割りで取り組んだ。先輩のリーダーシップ発揮による主体性向上等、様々なメリットが感じられた。また、来年度に向けての組織の再編や企画の準備等を、今年度中に進めていきたい。

評価指標（学校の実践課題）	具体的な取組内容
○発達段階に応じたキャリア教育の推進	・校外学習での職業講話の実施（1年生） ・職場体験学習の実施（2年生） ・高校説明会等の実施（3年生）
○地域に学び、地域に貢献する気概をもった生徒の育成	・十和田魅力アッププロジェクト（TAP）の実施 ・地元企業との連携
○地域と連携した地域を元気にする取組の実践	・地域関係施設と連携した合唱訪問 ・保存会と連携した毛馬内盆踊り講習会の実施 ・学校祭を通した学習成果の発信 ・生徒会におけるボランティア活動への取組

< 資料 > ※【 %】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合

○進路学習を通した進路指導【生徒92% 保護者62%(12月)←53%(7月) 教職員100%】

○ふるさとのよさを知ること【生徒93% 保護者86%(R4)←77%(R3) 教職員100%】

○地域への発信【教職員100%(R4:12月)←95%(R4:7月)←50%(R3:7月)】



【2年校外学習での職場体験学習】



【TAP大湯ストーンサークル館内英語ガイド】



【地元企業との意見交換会】

基本方向3「情報活用能力とコミュニケーション能力をもった、自分らしく輝く人材の育成」

児童生徒の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	ICT機器活用への関心は、生徒・教師ともに高い。研究主任を軸に、より効果的な活用や実践の蓄積を図りたい。	中間	4	中間	4	十和田中が誇る情報活用能力。ICT機器の活用が授業のみならず、各分野で日常的に行われ、生徒の学習意欲を高めている。コミュニケーション能力の向上は様々な機会に磨いていけると良い。
年度末	教育ICTの積極的な活用が図られた。また、新しい電子黒板が6台追加され、より効果的に推進されている。	年度末	4	年度末	4	ICT先進校として、市教育の推進役となっている。生徒自身のICT機器活用スキルの高まりや情報モラル教育への対応も見られる。コミュニケーション能力の向上を目指す上で、関係機関と連携しながら様々な場を活用してみることも効果的と思われる。
自己評価の概要と学校の改善策	【中間評価】教育ICTのクロムブックが導入され2年目を迎える。研究主任（ICT担当）のリーダーシップと各教職員の実践意欲の高さから、昨年来、ICT機器の活用は文房具のように自然に活用する場面が見られる。今後も、より効果的な活用を進めていきたい。今年度も、毎週木曜日の帰りの会の時間帯に、各学年の中央委員企画による学年集会を実施している。今後も、学級活動や生徒会活動の場、教科での対話活動等を通じて、コミュニケーション能力の向上を図りたい。					
	【年度末評価】今年度も、年間を通して、授業はもとより委員会活動（生徒総会や委員会だよりの作成等）、行事（十中祭や避難訓練等）、健康観察等の様々な教育活動の場面で、教育ICTの積極的かつ効果的な取組が実践された。11月に最新の電子黒板が6台追加されたことで、さらに効果的な使用場面が増えた。使用機会が増えるにつれて、生徒のICT活用スキルも高まっている。反面、情報モラル等の使用に当たっての課題も発生してきており、ルール作りも合わせて進めていく必要がある。今年度から、ICT委員会を新規創設し、生徒自身によるICT利用の規範意識の醸成も促してきており、来年度はさらに高めていきたい。 各委員会による集会や生徒会事務局企画、学年集会等を通して、生徒のコミュニケーション能力の向上を図った。生徒の発想を生かし、楽しみながら意見交流を行うことで、互いのよさについて気付き、安心してコミュニケーションを図るための素地作りも進めていきたい。					
評価指標（学校の実践課題）		具体的な取組内容				
○学びの質を高めるICTの活用と情報モラル教育の推進		・各教科および特別活動等におけるICTの活用の推進 ・ICT活用研修会の実施と情報提供 ・各教科におけるICTの活用と情報モラルの指導（学習指導部） ・情報モラル教室の開催（生徒指導部）				
○コミュニケーション能力の向上とグローバル化に対応した情報発信		・学級による話し合い活動や生徒会活動、集会活動の充実（TPOにあった話し方）				
○鹿角のよさ、十和田のよさを知り情報発信できる生徒の育成		・十和田魅力アッププロジェクト（TAP）の実施（活動内容の充実による情報発信） ・校外学習の実施				
< 資料 > ※【 %】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合 ○教育ICTの活用【生徒97% 保護者90% 教職員95%】 ○県学状アンケート(1・2年)「教育ICTの使用」 「ほぼ毎日」【十中:82%(R4)←61%(R3)、県平均:35%(R4)←25%(R3)】 ○コミュニケーション力の向上【生徒91% 保護者74 教職員100%】						
						
【2年理科「天気図の学習」】		【新電子黒板を用いたICT授業】			【生徒会事務局企画集会】	

基本方向4「豊かな心の育成」

児童生徒の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	新たな集団で不安を抱えている生徒もいる。アンケートやQU、スクールカウンセラー等を活用しながら早期対応を図りたい。	中間	3	中間	3	教職員の着実な努力に感謝したい。今後、豊かな経験や様々な人物との交流、質の高い芸術に触れる機会を通して、豊かな心を育んでほしい。また、保護者・関係機関との連携を充実させ、いじめや人権侵害にチーム学校で対応してほしい。
年度末	道徳の授業や指導方法について、頻繁に協議されている。毎月のアンケートや相談活動、日々の観察や検査結果等を通して、生徒の状況に早期対応することができている。	年度末	3	年度末	3	他を思いやる心を教育の様々な場(学級、部活動、集会、委員会活動、道徳等)を通して育ててほしい。多様な生徒へ対応するためにも、専門的な力や地域のサポートも得ながら、生徒の心の機微に対応してほしい。
自己評価の概要と学校の改善策		【中間評価】6月に実施した第1回hyper-QUの結果をもとに、全教員で研修会を実施し、生徒の状況や今後の個別対応について協議した。道徳教育では、授業実践の積み重ねとポートフォリオ形式での道徳ノートの蓄積を行い、着実な取組を継続している。毎月実施している「生活に関するアンケート」や教育相談をもとに、いじめの早期発見・早期対応を行うことができた。今後、悩みを抱えている生徒がより相談しやすい状況作りや自らSOSの出し方などの対処の仕方を身に付けさせる力も育てていきたい。				
		【年度末評価】中学校道徳の教科化から4年目を迎え、本校でも着実に実践が積み重ねられており、生徒、保護者、教職員ともに、道徳教育に対する肯定的な捉え方が高い。来年度も、チームでの道徳の授業や発問の吟味等、指導の在り方について、全校体制で進めていきたい。 年度当初の集団作りや学校生活の経過とともに起こる生徒間での様々なメンタル面でのトラブルに的確に対応するために、毎月の生活に関するアンケートや教育ICTによる個別の健康観察、相談活動、hyper-QUの6月と11月の結果比較による集団や個の分析、スクールカウンセラーによるカウンセリング等、複数の側面から生徒のメンタルサポートを行ってきている。来年度も、生徒支援専任教員のコーディネーターとして機能を生かしながら、いじめや問題行動への未然防止や及び早期対応に努めたい。				

評価指標（学校の実践課題）	具体的な取組内容
○活力ある集団活動を通じた居心地のよい集団づくりと豊かな人間性の育成	・hyper-QUの実施（年2回）と分析・情報交換 ・hyper-QUの個表の活用 ・生徒指導共通実践マニュアルの徹底（自尊感情・自己肯定感の醸成）
○道徳教育の充実と「特別の教科 道徳」授業実践による道徳的判断力・心情・実践意欲の育成	・道徳ノート（ポートフォリオ形式）の活用 ・学校、学年重点目標の設定 ・特別活動、生徒指導、総合的な学習の時間における重点の設定
○いじめ防止と教育活動全体を通じた人権教育の推進	・生活に関するアンケート調査の実施による早期発見と早期対応 ・スクールカウンセラー等の活用による相談活動の充実

<資料> ※【%】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合

○居心地のよい集団づくり【生徒89% 保護者83%】

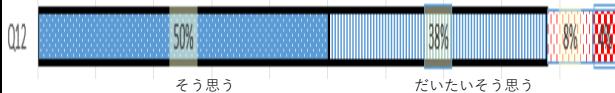
○道徳教育の充実

【生徒95% 保護者83% 教職員100%】

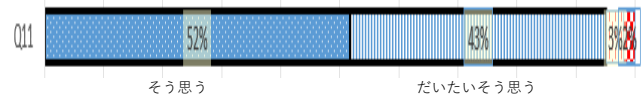
道徳の学習について、生徒・保護者・教職員ともに肯定的に捉えている割合が高い。

○いじめ防止・人権教育【生徒88% 保護者71%】

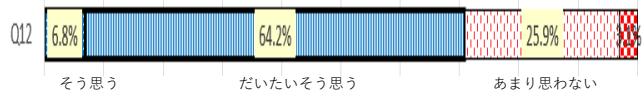
【生徒】毎月の生活に関するアンケート調査は、いじめ防止や悩み事の相談方法として役立つものとなっていますか。



【生徒】道徳の学習は、多様な価値観に触れたり、考えを深めたりする学習になっていますか。



【保護者】毎月の生活アンケート（いじめ調査含）やスクールカウンセラーの活用、教育相談などは、いじめや問題行動の未然防止に役立っていると思いますか。



基本方向5「健やかな体の育成」

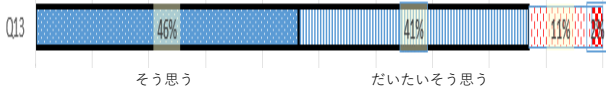
児童生徒の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	概ね望ましい生活習慣の定着が図られているが、睡眠不足やメディア依存による体調不良等の課題が見られる。	中間	3	中間	3	個々には課題を抱えている生徒もあり、HANキャンペーン等を効果的に活用・強化し、保護者・家庭の協力を得るための努力を今後も継続してほしい。部活動や保健体育の授業等を通して、「心技体」のバランスを取れる人であるよう指導を続けてほしい。
年度末	全体的には望ましい生活習慣の定着が図られているが、個別に見るとゲームやスマホ等のメディア依存による体調不良等の課題を抱えている生徒がいる。	年度末	3	年度末	3	家庭との連携がとても大切な分野であり、今後もコミュニケーションを図りながら、生徒の体や心の向上に努めてほしい。早寝早起き朝ご飯の与える成長後の影響について結び付けながら指導を行うことで効果的な取組になると思う。
自己評価の概要と学校の改善策	【中間評価】6月に実施したHANキャンペーンでは、ほとんどの生徒が就寝時刻やメディアの使用時間について意識した生活を送ることができた。今後は生活習慣に関するアンケートの結果やHANキャンペーンの取組について保護者に周知し、個別の支援が必要な生徒については、学校で得たデータを活用し、面談等を通して、家庭との連携を深めていきたい。新体力テストを含めた授業や部活動への取組は、概ね意欲的である。筋瞬発力と全身持久力、巧緻性、柔軟性が低い傾向にあるので、2学期以降の取組を工夫していきたい。					
	【年度末評価】生徒が帰宅後の時間の使い方について意識したり、自分の課題を改善するため、各学期に1回、HANキャンペーン(6月、11月、2月)を実施した。面談等の場を活用して、保護者にキャンペーンの個人データの提示を行うことが徹底できるとさらに効果的であると感じた。結果、11月は6月と比較して睡眠時間とメディアの使用時間の改善がみられた。また、家庭でキャンペーンに取り組みやすいように小中同時に実施する機会も持つことができた。次年度は、さらに小中連携を強化していきたい。 鹿角校長会で企画された「1人1チャレンジ(全校生徒が毎日自分で取り組む運動目標を設定し実践)」に、本校では11月中の3週間で取り組んだ。腕立てやスクワット等、一人一人が無理なく毎日継続して運動に取り組むことをねらいとして実施された。近年、感染症対応ため、体を動かす機会が限定される傾向にあり、生徒の運動機会の確保の上でも効果的な実践となった。					

評価指標(学校の実践課題)	具体的な取組内容
○家庭との連携による望ましいライフスタイルの構築	- HANキャンペーンの実施(早寝早起き・朝ご飯・メディアコントロール) - 三者面談を通した保護者との生活習慣に係る課題の共有
○食に関する指導の充実と家庭と連携した望ましい食習慣の形成	委員会活動による望ましい食習慣の形成
○健康と体力の保持増進と運動に主体的に取り組む生徒の育成	- 新体力テストの実施と分析 - 保健体育科の授業実践による体力の向上 - 部活動における体力向上の取組 - 体力向上一人1チャレンジの実施(鹿角中学校統一実践事項)

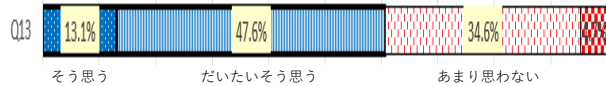
<資料> ※【%】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合

○ライフスタイルの構築【生徒87% 保護者51% 教職員85%】

【生徒】HANキャンペーンや委員会活動による呼びかけは、早寝・早起き、朝食をとる、メディアに触れる時間を減らすなど、望ましいライフスタイルにつながっていますか。



【保護者】HANキャンペーンや三者面談などを通した家庭との連携は、お子さんの、望ましいライフスタイルにつながっていると思いますか。

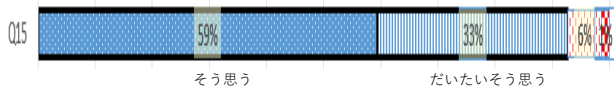


最近の傾向として、生徒と保護者の捉え方に大きな差が見られる。メディア使用等について、家庭内でのルール作りが課題となっている。

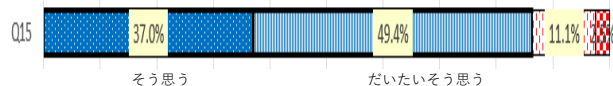
○食習慣の形成【生徒89% 保護者83% 教職員100%】

○体力の保持増進【生徒93% 保護者86% 教職員100%】

【生徒】あなたは、健康や体力の向上を意識して、積極的に運動や部活動に取り組んでいますか。



【保護者】お子さんは、健康や体力の向上を意識して、積極的に運動や部活動に取り組んでいると思いますか。



基本方向6「子ども一人一人のニーズに応じた、きめ細かな教育の推進」

児童生徒又は学校の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	今年度も個に応じた特別な支援を必要とする生徒が多く、アンケートや面談をもとに、生徒理解及び早期対応に取り組んでいる。	中間	3	中間	3	生徒理解のための教職員の研修(ケース会議)を今後も進めてほしい。本人や保護者との個人面談等のやりとりを元に、得意なことや課題を明確にしていくことで、きめ細やかな対応につなげることができるのではないだろうか。
年度末	学校生活が進むにつれて、生徒の抱える課題も明らかになり、一人一人に応じた支援を、PDCAに基づき、チームで行ってきている。	年度末	3	年度末	3	不登校については、学校、家庭、関係機関との緻密な連携強化が今後必要である。支援が必要な生徒への個別の対応がこれからも求められるため、生徒からのSOSに敏感に対応できるようたくさんの目で見守ってほしい。
自己評価の概要と学校の改善策	【中間評価】生徒支援の視点から教室環境の整備や学習形態の工夫、教育ICTの導入に取り組んできている。十和田中学校区研修会では、教育ICTとhyper-QUの活用方法について本校教諭が指導者となって研修を行い、小中全体で理解を深めた。今後、小から中への接続に生かすことができると効果的である。「生活に関するアンケート」や教育相談をもとに、不登校傾向生徒の早期発見を行い、ケース会議等を実施し、チームで個別の支援体制を行うことで未然防止に努めてきている。					
	【年度末評価】年間を通じて、「生活に関するアンケート」やhyper-QU等の調査結果、教育相談をもとに、不登校傾向生徒の早期発見及び早期対応を行ってきている。不登校傾向が予想される事案が起きた際は、早期にケース会議等を実施し、チームでの協議及び支援体制の確立を行うことで未然防止に努めてきている。しかしながら、今年度も新規の不登校生徒及び不登校傾向の生徒が出ており、今後もきめ細やかな支援の継続が必要である。生徒支援専任教員と各学年部が連携を取りながら、学級に戻ったり、登校できたりすることができるよう、常に当該生徒や保護者とのつながりを継続し、適切な関わりをもちたい。					
評価指標（学校の実践課題）		具体的な取組内容				
○ユニバーサルデザインの視点による授業づくりと教育ニーズに応じた多様な学びの場の構築		・教室前面掲示の簡素化 ・個、ペア、グループ等学習形態の工夫 ・教育ICTの有効活用				
○小中連携による情報の共有の場の構築と個別支援の充実		・学区研修会による情報共有 ・学習支援サポーターの活用 ・教育相談の実施				
○不登校の未然防止・不登校への適切な対応と教育相談の充実		・諸調査による不登校傾向生徒の早期発見 ・ケース会議の実施と早期対応 ・不登校生徒への学習支援 ・不登校生徒およびその保護者との定期的な面談・相談活動				
<資料> ※【 %】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合						
○ユニバーサルデザインによる授業づくり【教職員100%】 教育ICTの活用が積極的に図られ、多様な学びにつながり始めている。 【教職員】教室前面掲示の工夫、学習形態の工夫、ICTの活用等によりユニバーサルデザイン						
○小中連携・個別支援【教職員100%】		Q16 極めて良好 良好 概ね良好				
○不登校対応【教職員100%】 日常的な観察や生徒アンケート、出欠状況等を通じて、生徒の状況の変化について見取り、不登校傾向生徒の早期発見・早期対応に努めている。		【教職員】教育相談やケース会議、個別支援等の実施により、不登校の未然防止と不登 Q12 極めて良好 良好 概ね良好				

基本方向7「子どもの成長を支える魅力的で安全・安心・良質な学びの場づくり」

児童生徒又は学校の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	定期的な点検活動や安全指導、研修会等を実施しながら、安全・安心な環境作りに努めている。	中間	3	中間	3	教育環境や施設面等の整備に限られた状況の中でよく取り組んでいることに感謝したい。また、PTAの連携で安全・安心、良質な学びができています。ただ、他にも課題があり、継続して改善に努めてほしい。
年度末	年間を通して、定期的な点検活動や安全指導、研修会等を実施しながら、課題について協議し、改善を図ってきている。	年度末	3	年度末	3	防災・災害に対する行動は、日頃の訓練や意識付けが大切であり、今後もPTAの協力も得ながら、望ましい教育環境づくりに努めてほしい。校舎の老朽化は避けられないが、関係機関と連絡を取り、適切に対応してほしい。
自己評価の概要と学校の改善策		【中間評価】6月に、PTA厚生部主催のグラウンド及び校舎周辺整備作業を実施し、約60名が参加し、除草作業を行った。9月にも、第2回を実施する予定である。今年度は、第1回の避難訓練において、ICT機器でのeラーニングを活用し、防災学習「大雨の時にどう逃げる」も実施した。鹿角市のハザードマップ等も確認し、生徒の安全意識の向上を図った。5月定例職員会議の際に、3年部が担当し、不祥事防止ハンドブックを用いて、体罰防止の研修会を実施した。以降も、輪番制で実施し、教職員全体の不祥事防止に対する意識を高めていきたい。				
		【年度末評価】6月に続き、9月にPTA体育部主催による「第2回グラウンド及び校舎周辺整備作業」を実施し、約40名が参加して除草作業を行った。草刈り機を持参し刈り払い作業を行っていただいた方も多く、学校周辺の環境保全面でもたいへん効果的であった。11月に2回目の避難訓練（防災学習）を実施した。震災を想定した「防災小説」を読んだり、花輪東断層帯地震火災を想定し、予想される対応について確認したり、話し合ったりした。校舎の老朽化に伴う問題（雨漏り、外壁、側溝、トイレ等）も多数発生しているが、その都度、鹿角市教育委員会への報告や指示を受けながら確実に対応している。来年度も、点検や要望等の聞き取り等の情報収集に努めながら、柔軟に改善や対応を行っていききたい。教職員向けの危機管理マニュアルの全面的な見直しを行い、万が一の対応について職員研修を行い確認した。				

評価指標（学校の実践課題）	具体的な取組内容
○校舎内外の安全確保と活動が見える潤いある学校環境整備	・学校安全日の設定と安全点検の実施 ・PTA活動における除草作業の実施
○自分の命は自分で守ることができる生徒の育成と通学時の安全対策	・通学路の安全点検の実施 ・スクールバス乗車、下車時の安全指導 ・交通安全集会の実施 ・避難訓練の実施
○教職員の危機管理能力の育成	・学年部輪番制による学校危機管理・不祥事防止研修会の実施 ・管理職による不祥事防止研修資料の提供

<資料> ※【%】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合

○環境整備【教職員100%】

○安全対策【生徒98% 保護者94% 教職員100%】

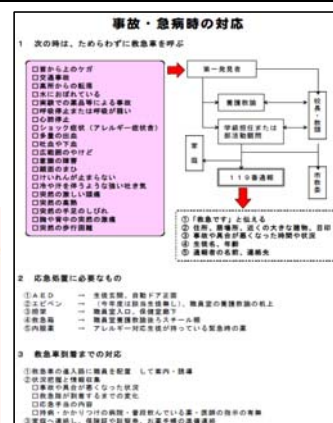
○危機管理能力【教職員100%】



【第2回PTA早朝グラウンド及び校舎周辺整備作業】



【「防災小説」を用いた防災学習】



【危機管理マニュアル対応例】

基本方向 8 「教職員のモチベーションと資質の向上」

児童生徒又は学校の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	若手教員も多い中、学校教育目標の具現化に向けて、教職員一人一人が業績目標を設定し、研修や改善に取り組んでいる。	中間	3	中間	3	研修、業務全般の改善の自己評価が高く、研修等が順調に進んでいることが伺えた。働き方改革等、今後も様々な試行錯誤を繰り返しながら、着実に進めてほしい。
年度末	研究主任が中心となり研究や研修を企画し、全教員で共有・実践していくことで、学校教育目標の具現化に取り組んでいる。	年度末	3	年度末	4	校内授業研究会、ICT活用推進に係る研修等十分に取り組んでおり、成果も出てきている。研修や働き方改革において、教職員の高い意識が伺える。人材育成においても、ICTを活用しながら進められていることが分かる。
自己評価の概要と学校の改善策		【中間評価】今年度から「ICTを活用した授業実践を通して」を研究主題の副題として設定した。研究主任（ICT担当）を中心に、ICT機器の効果的な活用方法について共通実践を図りながら研修を深めている。また、教職員一人一人が業務目標を設定し、管理職との面談をもとに各分掌や担当で可能な効果的な取組について実践している。今年度も「やめる・減らす・変える」の視点から学校行事や教職員の業務内容の見直し等を行い、継続するもの改善するものを協議しながら可能なことについて実践している。（ネットによる保護者アンケートの実施等） 【年度末評価】9教科（国語・数学・外国語・理科・社会・音楽・保健・家庭・道徳）について3回の校内授業研究会の実施や各種検査結果の活用、教育ICT活用推進に係る研修の実施、実践紹介等、研究主任がリーダーとなりながら、教科、特別支援、生徒指導、道徳、教育ICTの各分野において、チームで研究推進を行うことができた。また、その研究会での授業や研修の準備や振り返りを通して、若手教員も含めて、教育技能の向上の場となっている。来年度も、授業実践や校務分掌とのバランスを図りながら、主体的な研究推進を進めていきたい。 業務改善においては、昨年度以来、生徒の学習や学校生活への影響の有無を考慮しながら、「やめる・減らす（規模縮小）・変える」の視点から、通知票の内容精選、複合評価による定期テストの見直し、職員会議のペーパーレス化等、可能なことを実施してきた。各教員にも業務改善の意識が浸透し始めており、勤務時間外在校時間は過去2年の同時期と比較し、R2：約58時間→R3：約52時間→R4：48時間と着実に減少してきている。業務改善の効果や改善点については、常に定期的に検証を行いながら、次年度へつなげていきたい。				

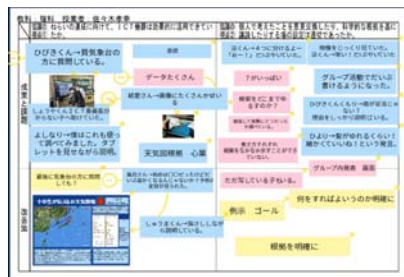
評価指標（学校の実践課題）	具体的な取組内容
○計画的な校内研修の実施と諸調査の活用及び校外研修の奨励と研修内容の共有	・校内研究、研修計画の立案 ・全国学テ、県学状、QU検査等の活用 ・教育ICT活用推進に係る研修の充実 ・初任研メンターチームによる研修の充実
○キャリアに適した業績目標の設定とOJT（OJL）による人材育成	・評価面談の実施による業績目標の設定 ・分掌チームによる若手教員の育成
○業務改善計画の作成と評価及びボトムアップによる業務改善と教職員の意識改革	・業務改善計画の周知 ・最終退校時間の設定とその厳守 ・「やめる・減らす・変える」視点による学校行事の見直し

< 資料 > ※【 % 】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合

○研修等による資質向上【教職員100%】

○研修の充実による人材育成【教職員100%】

○働き方改革【教職員95%】



【第2回校内授業研究会教員研修】



【初任者研修－授業研究会】（道徳）

研究主題 学び合いながら高め、学びがいを実感できる授業づくり ～ICTを活用した授業実践を通して～	
①授業プランニングの作成 ・資料・能力の明確化 ・「見方・考え方」を働かせた生徒の意思の喚起 ②授業を見合う会の開催 ・協働的な授業力の育成 ・コーディネートの力の育成 ICTを効果的に活用できる学習場面とN・I・S・R・D・T・A・Mを組み合わせて、生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業の展開	③ICT活用デザインフォームの活用 ・目的を明確にしたICTの活用 ・ICTの活用スキル向上 ④付いた力の明確化 ・チームを振り返りだしたICT活用研修
チーム「開拓」（研究副主任）	
小松（1年部） 田村（2年部） 棚沢（3年部）	

【ICT機器の活用目指した研究テーマ及び若手教員を含んだ研究推進チーム】

基本方向9「地域とともに特色ある学校づくりの推進」

児童生徒又は学校の状況		自己評価		外部評価		外部評価者のコメント
年度初め	地域と連携した特色ある学校づくりのために、全校縦割りでの十和田魅力アッププロジェクトや学校運営協議会(2年目)を企画し、実践している。	中間	4	中間	4	地域資源(地域住民・自然・文化・伝統等)をうまく取り入れながら連携を図り、積極的な活動がされ、お互い成長できる体制ができています。今後も、生徒会のアイデアや高校との連携等できることをどんどん取り入れていってほしい。
年度末	学校運営協議会での協議等や十和田魅力アッププロジェクトの活動を通して、地域課題の共有や地域の文化遺産継承の支援に取り組んでいる。	年度末	4	年度末	4	熟議では、地域の子供や大人が一堂に会して、目指す方向性について意識の共有化を図ることができた。環状列石等の情報発信やガイドを含め、中学生の智慧や力を生かし更なる活動の輪を広げてほしい。
自己評価の概要と学校の改善策		【中間評価】第1回学校運営協議会を実施し、今年度の学校経営の方向性や実践について確認した。第2回の協議会では、委員と全教員に加え、生徒代表等による熟議を予定している。毛馬内盆踊り講習会(1年)、大湯ストーンサークルタ日を見る会(吹奏楽部員22名参加)等を実施した。また、十和田魅力アッププロジェクトにおいて、毛馬内盆踊り保存会員、大湯環状列石ガイド、劇指導員(尾樽部和太さん)等の地域の方々との連携し、計画的に取り組むを進めることができています。今後も、地域貢献プロジェクト等においても、連携した企画を進めていく予定である。				
		【年度末評価】第2回学校運営協議会では、委員と教員、代表生徒(生徒会事務局)、保護者代表、地域代表の34名で「十和田地区の子どもたちに何を残し、何を育てていきたいか」をテーマに、熟議を開催し考えを共有した。生徒や地域代表を交えた熟議は他校に例を見ない取組で、今後、この輪をさらに広めていくことで、目指す方向性について、より意識の共有化を図ることが可能と思われる。感染症の状況を考慮しながら、より多くの人々が意見交流を行うことができる形を検討していきたい。 今年度は、十和田魅力アッププロジェクトの全校縦割りによる実施の効果もあり、年度の早い段階から、毛馬内盆踊り保存会や毛馬内大太鼓保存会、大湯環状列石ガイドボランティア、演劇指導者、弁当作りアドバイザー等、多くの方々から、指導や助力をいただきながら、各プロジェクトを進め、十中祭での発表を行うことができた。この成果を今年度中に見直し、その結果を基に次年度の体制作りを行い、来年度のスタートダッシュにつなげ、学校と地域が互いに地域文化について課題を深めることができる場としていきたい。				
評価指標(学校の実践課題)		具体的な取組内容				
○学校運営協議会機能の充実と熟議による地域課題の共有		・学校経営グランドデザインの承認・学校評価等 ・熟議による地域課題の共有				
○地域資源(史跡、企業、人材、施設)の積極的な活用と地域に開かれた学校づくり		・学校と地域双方向による地域資源の活用 ・学校地域協働実施本部事業の活用				
○地域と連携した特色ある学校づくり・地域伝統芸能の継承に係る活動の奨励		・毛馬内盆踊り等地域伝統芸能に係る講習会の実施 ・地域伝統芸能事業への参加奨励 ・TAP活動の充実				
<資料> ※【%】内の数値は各アンケートの肯定的回答割合 ○学校運営協議会【教職員100%】 ○地域資源の活用【教職員100%】 ○地域との連携【教職員100%】		Q25 0% 65% 35% 0% Q26 10% 55% 35% 0% Q27 30% 50% 20% 0% ■きわめて良好 ■良好 ■概ね良好 □やや不十分 ■努力を要す				
【学校運営協議会での熟議】		【毛馬内大太鼓指導】		【大湯ストーンサークルガイド練習】		